

どこか遠くから雨音が近付いてくる。  
その音に、浅い眠りから呼び覚まされた。

「ん……」

微睡みと現実の境を揺蕩いながら窓の外へと意識を向けると、いつの間にか風が唸りを上げ、木々をざわめかせている。

（そういや、今夜辺り嵐が来ると言ってたっけな……）  
窓がガタガタと揺れる音にぼうっと耳を傾け、口髭を擦りながら就寝前に見たウェザーニュースを思い出す。

（嵐、か……）

何だか急に雨風の音が耳障りに感じられて、オレは毛布を被ると寝返りを打った。

胸をチクリと刺した痛みには気付かない振りをして。

風はゴウゴウと唸りを強め、窓を叩き付ける雨脚はだんだんと激しさを増していく。

こんな夜は、決まって夢を見る。

とうの昔に忘れたはずの、あの日の夢を――



荒波に飲まれ、水に沈む。何度も、何度も。

その度に必死で藻掻いて水面に這い上がり、叫んだ。  
共に生きようと誓い合った、親友の名を。

アイツは強風に煽られ揺れる船の上から、じっとオレを見下ろしている。

オレは救いを求め、全てを飲み込もうとする波に抗いながら何度もアイツの名を呼んだ。

それでもアイツは、ただじっとオレを見つめて  
いるだけだった。

何か漠然とした不安のようなものが胸に過ぎる。

刹那、今まで微動だにしなかったアイツの唇が、  
スローモーションで動いた。

『あばよ、友達』

声無く紡がれたその言葉に、全ての時が止まった。

脳が理解するのを拒み、思考を真っ白に染め上げていく。

呆けているオレを、アイツは悲しみとも憎しみとも憐れみともつかぬ目で一瞥すると、くると背を